

親子による二言語創作絵本の活動
Original Picture books by Language Minority families

滑川恵理子, 京都女子大学
Eriko Namekawa, Kyoto Women's University

日本では、母語・継承語の学習や活動があまり盛んではない。この話題提供では、外国につながる人々が少なく、コミュニティもない「非集住地域」における小さな母語・継承語の取り組み、親子による二言語創作絵本の活動を紹介した。

この活動は Cummins 他 (2011) の「アイデンティティテキスト」を参考にしている。子どもたちにとって学びと育ちを支えることとは、親とつながる母語・継承語と日本語である。この活動は、親の母語と子どもがよく使う日本語をつなぐことを試みるもので、具体的には、母親の子どもの頃のエピソードや子育ての悩みを題材にオリジナルの絵本を製作する。二つの言語が併記された絵本である。母語部分は母親が母語で語ったことばで、日本語部分は子どもが考えた台詞や子どもの感想を活かした。この活動の狙いは、母語・継承語を地域社会が価値づけるということである。

フィールドは関西地域で活動する外国につながる親子のための支援教室「H 教室」である。H 教室では主に学校の宿題の補助、教科の補習、読み聞かせなどをしていて、クリスマス会などの季節のイベントも行う。創作絵本の他に母語・継承語の継続的な学習や活動は行っていない。ボランティア支援者の一人がセミプロの絵本作家で、絵本製作を担当している。

これまでオリジナルの絵本が二作完成した。一作目は中国出身の母親の子どもの頃のエピソードを題材としたもの（中国語・日本語）、二作目は、ある外国出身の母親が最近子どもが言うことを聞かなくて戸惑っているところから発想を得て、教室に通う親たち・支援者たちの多彩な反抗期にまつわるエピソードを綴ったものである（中国語・日本語版、アラビア語・日本語版）。

活動を通じて、子どもは「母語への関心」「離れている方の家族とつながる」などの反応を示した。母親は母語で物語を紡ぐことに自信と誇りをもっているように見受けられ、また視野が広がった様子もうかがえた。日本人支援者たちは子どもたちがもう一つのことばと多様な背景をもっていることを実感した。

現在三作目（メキシコ出身の母親のエピソード）を製作中である。今年度中にサイトを開設し電子化した絵本を公開する予定である。また親の母語に限らず多言語化することを考えている。さらにワークショップを開催して親とつながることばを介した「家族の物語／親から子へのメッセージ」などを収集したい。

（この活動は日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金：課題番号 19K13245）の助成を受けている）

参考文献

Cummins, J., & Early, M. (2011). *Identity Texts: The Collaborative Creation of Power in Multilingual Schools*, London: Trentham Books.